

## 米国のアクレディテーションの精神とプロセス

【司会：喜多村】

大勢お集まりいただきまして、ありがとうございます。私は私学高等教育研究所の主幹の喜多村和之と申します。今日の司会を務めさせていただきます。

今回は、第11回になりますが、その前、3月末に、わたくしと、それから今日通訳をお務めいただきます、鋤柄大阪商業大学教授と羽田日大教授等ら4人でアメリカのアクレディテーション、大学評価の実態について、調査してまいりました。アメリカのいわゆるアクレディテーションといわれるものが実際にどう行われているか。例えば、単にレポートだけではなく、実際に評価団が行って、大学を3泊4日で訪問して、それが実際にどういうふうに行われているのか、その後どういうふうにしてその評価の結果が反映されているか、ということをお我々の目で確認したいということで参りました。そして、そのことを3月の研究会でご報告申し上げました。

今回は、「アメリカにおける大学評価の新段階 アクレディテーションと日本の評価体制」という副題で開かせていただきましたが、それは、実はわたくしどもが、3月に参りました大学評価の調査は、今日お招きしておりますニューイングランド大学基準協会のチャールズ・クック先生がアレンジしてくださったものでございます。クック先生に今回、特においでいただきましたのは、日本でも今、いわゆる第三者評価というのが焦眉の急になってまいりまして、つい4月18日に中央教育審議会から「大学の質の保証に係る新たなシステムの構築について」という中間報告が、ちょうど出ております。それで、これは早急にヒアリングをうけるといいますか、私学団体も今週中ぐらいに意見を表明することになるのではないかと思います。実は、そのなかにかかれておりますのは、今までの自己点検評価に加えて、第三者が大学を評価するという方法を、そういう第三者評価システムを導入する。それをいずれ義務付ける、という方向がうかがわれるわけでありまして。義務になるかどうかは、これからの審議にかかるわけですが、そういう方向でもう検討している、

ということでございまして、第三者評価システムが義務として行われるようになるということは、ほぼ間違いのないと思われます。それから、それが、国立だけではなくて、私学にも義務化されるということは、間違いのないことでございます。中央教育審議会には、書いてありませんが、この方式というのは、実は、アメリカのアクレディテーション方式というものが想定されていると考えられます。モデルはアメリカのアクレディテーションだけではないと思いますが、メジャーな評価の仕方というのはアクレディテーションでございます。アメリカのアクレディテーションは、これからクック先生が縷々お話になりますが、この精神としては、大学評価を政府や外部にゆだねるのではなくて、大学自らが、あるいは自分たちがつくった大学団体の責任において行う、ということがアクレディテーションの精神であると思います。さらに、自分たちで、これが第三者評価として信頼されるに値するような評価を行うというのも、アクレディテーションの精神であろうと思います。今いろんな意味でアクレディテーション、アクレディテーションといわれているわけですが、果たしてそれが、本当の意味で理解されているかどうかということについては、私は、ある意味で疑問をもっております。そこで、本当の意味でのアクレディテーションとはいったいなんなのかということ、クック先生からお話をうかがうということで、この度こういう会を企画したわけでありませう。

チャールズ・クック先生は、アメリカですでに 100 年の伝統をもちます、ニューイングランド基準協会 (New England Association of Schools and Colleges) の高等教育機関のエグゼクティブ・ディレクターでいらっしゃいます。1981 年から、約 20 年間にわたってその最高責任の地位にあるわけでありませう。従いまして、すでに 25 年にわたって、いわゆるリージョナル・アクレディテーションという、地域別、大学全体を評価の対象にするアクレディテーションを身をもって実施され、組織され、リーダーシップを発揮しており、おそらくアメリカでこれだけ長い経験をお持ちの方はおられない、というふうに思うわけでありませう。それからニューイングランドは、アメリカで最初にアクレディテーションの発生した地でありませう、これは、20 世紀の前に、現在では 100 年の歴史をもっております。そう意味では、まさに名門といえますか、本場でございまして、その本場の責任をも

っていらっしゃる方に、アメリカ的なア krediteーションとはどういうものであるか、  
ということの話をうかがう、ということであります。

なお、ア krediteーション組織というのは、実はアメリカから発祥したもので、これ  
はヨーロッパにも普及しておりまして、あるいは日本でも大学基準協会がすでに出来てお  
りますし、それから韓国でも、それからオランダ、それから今ドイツでもア kredite-  
ーションはいろいろな形で導入されています。

## 講演全文【通訳：鋤柄】

みなさん、こんにちは。

**通訳補足：**今日は、たいへん長いプレゼンテーションなので、大事なところをクックさんがスライドで用意してくださいましたので、今日は全訳ではなくて、スライドに書いてない部分を訳すようななかたちでさせていただきたいと思います。

それで、今日お話する、ア krediteーションについてですが、ア krediteーションについての学問的な研究成果とかということではなくて、実際に大学評価がかかわっている、プラクティス (practice) な、という言い方をしていますが、実際がかかわっている者としての経験を皆さんと一っしょにシェアさせていただきたい。私どもが、私が属しております、ニューイングランド地区の大学、ニューイングランド地区のこのアソシエーションには、200 校の大学が加盟しております、その 200 の大学で学んでいる学生は、だいたい 50 万人でして、ひとつはハーバードのように、ものすごく有名な大学から、たった 20 人しかいないような小さな大学まで、さまざまな学校の審査にあたっています。そして、今日お話しします一番大事なことは、確かにアメリカ的な評価の仕方ですが、それは同時に世界の大学に共通する指針を与えるのではないか、という、そういう観点から、お話しさせていただきたいと思っています。

### アメリカ高等教育の特色

評価に入る前に、まずみなさんにアメリカ高等教育の概要について、お話ししたいと思います。ここに書きましたように、アメリカの大学の特色は 3 つの用語で、特色づけられると思います。一つは、たいへん大きなものであり、サイズが大きいということ。それから、多様性がある、ということ。それからもう一つは、個々の大学間がたいへん競争的な関係にある、ということでもあります。それで、現在、3000 以上の認定された大学が存在しているわけですが、それは、いわゆるヨーロッパ型の 4 年制の大学というのがありますが、アメリカでよく発達した 2 年制のコミュニティ・カレッジですとか、あるいは、

専門の大学院大学ですとか、さまざまな種類の大学、数だけでなく種類においても大変多様性をもった学校であります。特に学生数においても、ある学校は何万という学生をかかえる学校もありますし、あるいは、500 人くらい、あるいはもっと小さい数の先ほど言いました、数十人に満たない学生を抱える大学院も存在しているわけです。それから、もうひとつの特徴、多様性の特徴のひとつは、私立の大学と公立の大学、つまり、ある公的な資金の援助のある学校と、それを受けていない大学という2種類の学校があり、数の上では私立の方が多く、学生数では州立大学、すなわち公的な資金を受けている学校で学んでいる学生数が多いという現状です。さらに多様性のひとつとして、学生の年齢でございます、これまでのいわゆる18歳で高校を出た学生だけではなくて、多様な学生が大学で学んでおり、大学の平均年齢、在学者の平均年齢は、もう既に30を超えていて、さらにその年齢が上になっていく傾向にあるということです。

アメリカの大学をひとつの企業体と考えるならば、たいへん競争的な企業体でございます。その理由のひとつは、政府の支配、統制下になくて、個々の大学が自由に競争できる環境にあるということ、しかも、私立の大学が多いということ、またアメリカ社会がもっている競争的な社会に対応するために大学が機能しているということ、であります。しかも、その大学がもっている競争性ということが、これからお話しします大学の評価ということとたいへん強い関係をもっています。

#### アメリカ高等教育における政府の役割と権限

アメリカの多様な高等教育に関して、アメリカでもいわゆる文部省、教育省はございますが、アメリカの大学の質の確保に関して、ある面でたいへん限られた役割しか果たしておりませんので、それはすべて大学当局の責任の下で行われています。例えば、アメリカの大学の設立に関しては、確かに州政府から非営利団体としての設立の認可は得る必要はありますが、運営に関してはまったく個々の大学がその責任をもっているわけでありまして、そういう面で、州立大学であったとしても、個々の大学は自由にその大学を運営すること

ができる、つまり、相互に競争する自由さをもっているということでもあります。

このようにアメリカにはたいへん多様な高等教育機関が存在している。しかも、そこに政府の統一的なコントロールがないというような状況の中で、アメリカの大学が認定されたり、あるいは評価というのは、たいへん混乱に満ちているのではないかと外部の方々から評価される所以であります。このアメリカの大学のアクレディテーション、基準認定というのは、単に大学としての存在のステータス、状況を示すだけではなくて、実はその大学の質を保証し、同時にその質を向上させるためのたいへんアクティブな、積極的な活動、それ自体を指しているのです。

アメリカで行われている大学の基準認定、アクレディテーションは決して政府主導のもとはなくて、あくまでも自主的な、民間の、非政府的な活動、としてとらえられています。そして、それは積極的に、各大学が自ら進んでやる活動、というふうにとらえられています。この、外から監視されない、同時に、大学が自らやる、この二つの面が、アメリカのアクレディテーションの特色を形づくっています。

このようにアメリカでおこなわれている大学の基準認定というのは、まったく自主的な活動であります。にもかかわらず、大学は、この自主的な基準認定というのがなくても存在できるのではないかと、という議論がなされるわけですが、現実にはこういうことがなされているにはいくつかの理由があります。それは、その基準認定がなされることによって、その利益を受けている人もたくさんいるということです。いくつかの例をお話ししますが、例えば、ひとつの大学を卒業して、他の大学院に進むときに、基準認定を受けている大学からでないとその大学院に行けないとか、または就職するときに、ある企業が認定を受けた大学の卒業生を主に採用するとか、あるいは、認定を受けた大学から受けた資格を持っていなければ教職につけないとか、そういう面で、結果的に基準認定は、ある社会的な役割を果たしているわけです。また、逆の言い方をすれば、アメリカには、自主的に行わ

れている基準認定（アクレディテーション）を、受けていない団体、学校は存在しない。あらゆる学校はなんらかのかたちの、自主的な自分でやっているアクレディテーション、基準認定をもっているということがいえると思います。

アメリカで行われている、この基準認定、アクレディテーションそれ自体は、長い歴史を持っていますが、ある面で既に出来上がったシステムといえないところがあります。すなわち、いつもその状況に合わせて、内容、方針を変えていっている。ただ、共通しているのは、大学の質を保証し、その大学の質がさらに向上するという目的をいつも探求していることです。

#### ニューイングランド基準協会の役割

それでは、これから、私が関係していますニューイングランド地区のアクレディテーション協会について、もう少し詳しくお話ししたいと思います。私どもが行っている基準認定は2種類ございます。1つは、インスティテューショナル・アクレディテーション（Institutional Accreditation）といわれているものであり、もう1つは、スペシャライズ(specialized)とか、プロフェッショナル(professional)といわれているアクレディテーションであり、最初のインスティテューショナル、組織認定というのは大学全体が、大学として機能しているかどうかということをチェックする活動であり、もう1つのプロフェッショナル、あるいは、スペシャルといわれているものは、個々のあるプログラム、大学院のプログラムですとか、そういうものを基準認定するあり方であります。そして、私どもニューイングランド地区基準協会では、200の大学、それは6つの州に存在している200の大学を対象に基準認定を行っております。

専門といいましょうか、特別基準認定のことをもう少し詳しくご説明しますが、これは例えば、法律ですとか、医学だとか、教育ですとか、そういう専門領域のプログラムを特に認定する活動でして、そこには、いわゆる、教養プログラム、学部における教養、ここ

では、アーツ・アンド・サイエンス(Arts and Sciences)とっていますが、プロフェッショナルなアーツ・アンド・サイエンス・プログラムのための特別認定はございません。そのプログラム、大学の基本的な教養プログラムに関しては、それは、先ほど言った、インスティテューショナル・アクレディテーション、その大学自体の認定のなかに含まれています。

これから詳しくご説明しますが、この2つの基準認定の方式は、両方とも同じであります。すなわち、基本的に言えば、この2つともノン・プロフィット・エンティティ(not-for-profit entities)、すなわち、非営利のボランティア団体によって行われていること。そして、そこで行われている活動のために使われているお金は、費用的には、たいへんわずかなお金でなされていること。それから、そこで活動している方々は、大学の同僚たちであるということ。そして、プロセスに関して、方式に関して言えば、基本的に個々の大学、あるいはプログラムが一種の自己評価をし、その自己評価が正当であるかを外部の者がチェックし、そのチェックに基づいて、委員会が基準に達しているか、達していないかという判断を下すという、やり方においても、組織においても、両方とも同じやり方をしています。

#### セルフ・スタディとセルフ・レギュレイトの精神

もう少し詳しく、両方に共通するプロセス、方式についてお話したいと思います。まず、基準協会から、個々の大学、あるいはプログラムに関して、あなた方の持っている目的や、自分たちのやりたいことを書いている、その学校の方針とかに従って、まず自分自身をよく調べ、セルフ・スタディ・レポート(self-study report)、自己点検評価報告書を作成してください。それがなされると、それに基づいて、その通りに、実際に学校が運営されているかどうかを、外部の者がチェックし、その結果に基づいて評価を下すという方式であります。

この基準認定は、その大学の歴史において1回しか存在するのではなくて、ある時間ご



と、ある期間を通して何回も繰り返される作業であります。特に、大学本体が基準認定されるインスティテューショナルなアクレディテーションのほうが、期間的には長く、だいたい10年くらい、あるいはさらにスペシャルプログラム、個々のプログラムの認定についてはもう少し短い期間、5、6年の期間で繰り返されます。しかも、その間に何もなかったら、10年なら10年に行われる基準認定のプロセスの中で必要な報告があれば、その報告を毎年出すように要求されますし、あるいは、その学校の、モーダル(modal)という言葉を使ったのですが、その学校の基本的な性格や目的が変わったような場合、例えば、大学院が出来たり、あるいは新しい学部が増えたりと、モーダルな、その学校の基本的な性格が変わったときには、絶えず、さらに、このアクレディテーションを受けなければならないようになっております。そのようなものがなくても、10年間放っておかれることはなく、その間中、個々の大学は、セルフ・レギュレート(self-regulate)、自分自らを律するという活動を行うことが要求されています。

それでは、最後にもう少し詳しく基準認定の方式についてお話ししたいと思います、このインスティテューショナル・アクレディテーション、大学全体を認定する認定の仕方はインスティテューショナルという呼び方と、同時に、このニューイングランド地区のように、全米の6つの地区、リージョナルの地区の基準協会が認定するのでリージョナル・アクレディテーション(regional accreditation)とも呼ばれているということが第1点。そして、そのリージョナル・アクレディテーション、大学の基準認定は、その大学が全体として掲げている目的に従った大学であるかということです。何か、外部に客観的な大学の基準があるのではなくて、ミッション・ドリブン(mission-driven)、すなわち、その大学が持っている建学の精神や目的に合って、その大学が運営されているかどうかということをチェックする、それがアクレディテーションの基本的な姿勢です。ですから大学に尋ねることは、お宅の大学のミッション(mission)、目的は何ですか、そのミッションに従うようにプログラムはできていますか、そのミッションに従うように作られているプログラムを運営する教員やスタッフや施設やさまざまなものは揃っていますか、という聞き方で、

その大学をチェックする、ということでございます。

## ミッションと目標

別の言い方をしますと、その大学は自らが掲げる目標とか目的に従って評価されるということでありまして、外部に、これが大学の基準だ、というものが存在しているわけではありません。ですから、それぞれの大学によって、その基準は違って来るわけでありまして、このようなたいへん大雑把である、オープン・エンディッド（open-ended）という、つかみどころがない、永遠に開かれた可能性のあるような方式で、大学をチェックすることは、たいへん混乱を招くのではないか、ということもありますが、実はこのことをすることが、アメリカの大学でありまして、アメリカの社会に、たいへん大きな活力や、自由さや、あるいは創造性をもたらしているといえると思います。

このように、その大学が掲げる目標に従って、あるいは目的や目標に従って大学を評価するということは、結果的に大学の自主性を尊重する、あるいは、自主性をさらに支援するということにつながる。それから、もう1つは、大学教育、特に教育の中身を評価するということは、何か1つの定まった基準で測れるものではなくて、たいへん多様な変化に対応する方式で評価しない限り、それは難しいだろう、ということです。それから、第3番目に、このような自ら掲げる評価、目標や大学設立の理念に従って大学を評価するということは、さらにその大学が成長する余地を、あるいは成長する可能性を、さらによくなっていく可能性を、保証するものであるからです。つまり、今、大学としてふさわしいだけでなく、将来に向かってさらに発展するということを支援する活動であるということです。

## 11 の評価項目と基準

ただし、とは言いまして、大学を評価するときに、私の基準協会では11の項目に従って、その大学が自ら掲げる目的に従って大学が運営されているかどうかをチェックしてい

ます。ここに 11 掲げてありますが、ミッション・アンド・パーパス( mission and purposes )、大学が掲げる建学の精神と目的、それから大学はその計画に従って、どういう年次計画を作り、その年次計画をどのように達成しているかを自ら評価しているかどうか、それから、そのために必要な組織体を作っているか、その組織をどのように運営しているか、具体的なプログラム、その教育方針、それを支える教員、あるいは、図書館やさまざまな教育工学的な施設が存在しているかどうか、具体的な学生サービスはどのようになされているか、あるいは、フィジカル・リソース ( physical resources ) というのは大学の全体的な施設の問題、それからそれを支えるためのお金は具体的にどのように運営されているのか、また、それらのことがパブリック・ディスクロージャー ( public disclosure )、外に向かって公開されているかどうか、というような観点から見ますが、個々にこの 11 に、それぞれスタンダードがあるわけではありません。こういう観点でその大学を調べるといことです。

ここに掲げました、11 のいわゆるスタンダード、基準というのがありますが、何か数的な、あるいは決まった、そういうスタンダードではない、ということ。ですから、基本的に、繰り返しになりますが、自ら掲げる建学の精神、大学の目的にあった大学であるかということを私どもは調べているわけであります。ですから、このようなある面でオープン・エンディッド、永遠にオープンなままでいる、あらゆる可能なものを調べる、ということはいへん専門的な力といえましょうか、判断が要求されますし、私どもはそれができていると確信しております。しかも、このようなかたちで大学を評価するという場合には、同じタイプの大学であっても、個々の大学ではまるっきり違いますし、個々の大学は同じような種類の大学であっても、いろんな違ったことをやっているわけですから、何か基本的に共通するスタンダードとして、それを調べるということがたいへん難しくなっております。とはいっても、長い経験を通して、大学に共通するひとつの基準というものを見つけ、それを何かのかたちで具体化していく方式を我々は発見したわけであります。例えば、大学が大学それ自体として認定を受けたということは、その大学が持っているプログラム

が他の大学に比べても優れたものであったということを、評価することにもなってくるということでございます。

ここに掲げた、先ほど掲げた 11 のスタンダードにしる、こういう基準はどうやって作られていくかと、具体的なことをお話しますが、まず、繰り返しになりますがアクレディテーションそれ自体は、セルフ・レギュレイト、自ら、そういうものを作っていく、つまり、基準を、ここに掲げた 11 の基準を、基準協会のメンバー校から派遣される、その大学の学長であったり、学部長であったり、スタッフの人々が集まって、そういうものを決めていく。また、各大学がこのエバリュエーションのためにサイト・ビジット(site visit)に出かけますが、そのサイト・ビジットに出かけた方々にアンケートをとって、こういう項目で大学を調べることが適切なのだろうか、新しい項目をどうしたらいいのだろうか、というようなことをいつも調べており、実はニューイングランド・アソシエーションも、このスタンダードを状況に合わせて変えようとしています。そして、それを基準委員会(commission)、つまりニューイングランド基準協会の執行部の案が出来たら、それをまた、メンバーの学校に提案し、それに対する意見を聞いて、というように、この基準協会の掲げている基準が、第三者的に存在しているのではなくて、すべての人が共有して(オーナーシップ(ownership)という言葉が使われていますが)持っている。しかも、その基準協会の活動に全ての人々が参加している(パーティシパトリー(participatory)という言葉が使われましたが)、このオーナーシップとパーティシペイション(participation)ですね、その基準が、いっしょに保持していて、それに我々が共に参加しているのだというそういう精神で基準が作り上げられて、あるいは変化してきているわけであります。

先ほど申し上げた 11 の大雑把な個々の基準が、具体的にどういう基準で個々の大学に適應されているかという例をお話したいと思います。それは、各大学に要求されている、セルフ・スタディ・レポート(self-study report) 自己点検評価報告書のなかに、それを見ることができます。そして、この自己点検評価報告書は、ある意味で大学の活動を表し

た結果であります。その自己点検評価をすること、その活動に従事するということが、たいへん重要な働きでありまして、両方に共通していることは、決して判断ではなくて、その学校が、そのことを通して、その自己点検評価報告書をつくる作業、あるいは作り出されたその報告書を読むことによって、その大学が、さらによい大学になるように作られているということです。

具体的に個々の大学は、基準認定、ア krediteーションを受けるために、セルフ・スタディ・レポートを提出することが要求されていますが、具体的にそのセルフ・スタディ・レポートがどういうふうに、個々の大学で書かれるかを、具体的にお話したいと思います。多くの場合、大学では、その自己点検評価報告書を書くために、いろんな下部委員会が作られて、教務だとか、学生、図書館だとか、いろんな作業部会（sub-committees）が作られますが、セルフ・スタディ・レポートを書くための最高責任者は、一般に大学の学長がその責任者になってない、ということです。それからサブ・コミッティの責任者も、例えば、学部長とか学科長とかいう方々になるのではなくて、具体的に活動をやっているスタッフの人が、そのセルフ・スタディ・レポートのサブ・コミッティのチェアマンであったり、あるいは全体のセルフ・スタディ・レポートをまとめる係になっているということです。

ですから、いわゆる責任者が、自己点検評価報告書を書く責任者になっていないということをしてしまうと、一般のスタッフの人がそういう責任になっていくということになり、いろんなリスクを背負う可能性もあるわけですけれども、実はそういうことが大学がさらに向上するために必要なプロセスだと考えているからであります。

#### 大学評価のためのセミナーや研修会

私ども、基準協会事務局においてはですね、各大学がよりよいセルフ・スタディ・レポートが書けるような、2日間のセミナーをその大学のために行っています。さらに、その

大学の学長に対する特別なセミナーも行っています。さきほど言いましたように、その学長は、必ずしも、いわゆる自己点検評価書の編集責任者ではないはずですが、大学のトップとして、このセルフ・スタディ・レポートがいかに重要なものであり、大学の内部にとっても当然のことで、大学が、それが大学の外に与える影響に対する甚大であるかということ、これを大学の学長にわかってもらうための特別なセミナーを催しております。

そして、その各大学が、その大学の大きさにかかわらず、セルフ・スタディ・レポートは、どこの大学も、約 100 ページほどの、たいへん薄い報告書としてまとめるように要求しています。ですから、セルフ・スタディ・レポートは、ある面で、たいへん一般化した、(ジェネラリゼーション (generalization) という言葉が出てきますが) かたまりであって、個々の細かいデータとか、細かい点に関しては、ある面で捨象されているような、まるくなった、ただし、その大学が掲げる大学の目的に従って、その大学が運営されているということがわかりさえすれば、個々のデータ、個々の細かい点に関してはなくてもかまわないもの、そういう 100 ページほどのレポートとして、自己点検評価報告書が書かれることが期待されています。

大学が、書かなければならない、100 ページでまとめなければならぬ、このセルフ・スタディ・レポート、自己点検評価報告書は、3つの観点から書かれることが要求されています。1つは、ディスクリプション (description) という言い方をしますが、その大学が、具体的にどういうものなのか、事実を簡単に述べるということ。それから、第2点は、英語でアプレーザル (appraisal) と言っていますが、つまり誉めることですね。自分自ら掲げる大学の目的に従って、私どもの大学はこれだけうまくちゃんとやっていますよ、という、良い点をきちんと述べなさい。と同時に、欠けている点があったら、さらに我々は大学は次にはこういうふうにしようとしているのだという、プロジェクション (projection) 計画を書きなさい。この3つの英語で、ディスクリプション (description)、アプレーザル (appraisal)、プロジェクション (projection)、この3つの要素が、この

100 ページの自己点検評価報告書に掲げられていることが要求されています。特に、自ら自分のことを評価して、良い点は何かということをするのには、たいへん専門的な、ある面で公正な考え方が要求されることだと思います。

前のパラグラフで述べたキャンドウ (candor) という、公正さが要求される、つまり、正確に自分が、自分たちの大学はどのくらいうまくいっているのか、どのくらいうまくいっていないのか、ということ客観的に見つめて、それをとらえて書く、ということはたいへん難しい作業であるということをもう一回、ここで繰り返したいと思います。そうでなかったら、自己点検評価報告書は、単なる大学の宣伝のための文章になってしまうわけです。ある面で、この公正さ (英語で、キャンドウ (candor) という言葉を使っておられますが) このセルフ・スタディ・レポートを支える大きな要素であります。すなわち、大学がもっている現実に直面すること、もし弱さがあれば弱さを認めることです (実はそれは、強さである、とおっしゃっています)。

すべての大学が自己点検評価報告書をまじめに捉えているのか、例えば、有名な大学ですね、もう疑う余地がない、あの大学はもういい大学だ、と言われているような大学だって、ちゃんとこういうふうなセルフ・スタディ・レポートをやっているのかという疑問をお持ちの方は、資料としてお配りしましたウェブサイト (website) のリストがありまして、そこに、例えば、イエール大学のセルフ・スタディ・レポート、有名なハーバード大学のレポートとか、そういうものがアクセスできるようになっていますので、ぜひご覧になることをお勧め申し上げます。個々の大学、いわゆる有名な、もう基準認定が必要ないと思われるような学校ですら、大変まじめに、この自己点検評価報告書を扱っているのです。

その意味で、実は、セルフ・スタディ・レポート、自己点検評価報告書こそ、このアクレディテーションの中心的な活動であります。個々の大学が自らのことを自ら知ることができないときに、どうしてその大学が、さらに発展し、よくなっていくことができるか、

ということであります。

### ボランティアの精神

さらにセルフ・スタディ・レポートがあがってきて、具体的な評価は、どのようになされているのか、評価を担当する基準協会の内部について少しお話ししたいと思います。何回も繰り返していますが、この評価の方式は、具体的には、多くのボランティアの活動に支えられているということです。例えば、私の事務所には、4人の専門家と3人のスタッフ、全部で7人のスタッフしかいません。そして、予算としては、ワンミリオン(one million)ですから、約1億2,000万円の予算で、私どもが属している6つの州にある200の大学の評価を担当しているわけです。ですから、そのために、たいへん多くの無給の、ボランティアの方の協力なしに、この活動を全うすることはできません。

今言いましたように、この基準協会のスタッフはたった7人ですが、200の大学をチェックするためには、本当に大勢の、無償の(アンペイド(unpaid)とおっしゃっていましたが)ボランティア、それは既に基準協会のメンバー校になっている学校の先生方やスタッフや理事の方々、そういう大勢の方々がこのエバリュエーションの活動に協力して下さっています。では、なぜ、こんなに大勢のボランティアが協力してくれるのか、といえば、アクレディテーションそれ自体が、まさに、ボランティア、自らが自らを律するという活動であるからです。アメリカの大学のアクレディテーションの性格は、この参加するものが、自らその責任をとっていくというかたちをとっているといえます。ただし、それに参加することによって、参加した教員や、スタッフや、理事の方々は、このアクレディテーションの活動を通して、さらに自分が大学のことについてさらによくわかり、大学の発展のために対する智恵や知識を得る、自分も成長していくということも経験していますが、まずは、多くの方々のボランティア的な助けなしにこの活動はできていないということです。



個々の大学からセルフ・スタディ・レポートがあがってきますと、その大学に出かけて行って、そのセルフ・スタディ・レポートに従って、大学を調べる、評価するスタッフといいたいでしょうか、チームをつくる必要があります。それで、わたしどもの基準協会では、毎年、約 800 人くらいの候補者をいつも用意しておりまして、その中から、その訪問する大学のサイズや性格や目的にあわせ、また、先ほどの 11 項目がありましたから、それを担当できるようなバックグラウンド、経験をもった方々、その専門知識を持っている方々、というような組み合わせを考えて、チームメンバーを作ります。ですから、チームメンバーのなかには、私どもの場合には、イエール大学の学長さんもメンバーになることがありますし、小さな 2 年制大学の学生担当スタッフの人もそのチームメンバーの一人として参加することがあるわけです。そういうわけで、今 800 人ほどの候補者というか、エバリュエーションを行う評価者のリストがありますけれども、絶えず、基準協会では、そのリストがバラエティと数が増えていくように努力しております。

#### 実地訪問チームの形成と調査

個々の大学に訪問するチームが形成されるわけですが、そのチームは少ないときには 3 名ぐらい、一般には 10 名ぐらいの人数からなるチームが編成されます。そのチームのリーダーは、必ずしも、大学の学長だとか、副学長だとかという、組織のトップにある方とは限りませんで、ある場合には学科長であったり、あるいは、教員であったり、さまざまな方々がそのチームリーダーになる可能性があります。そのメンバーには、先ほど言った、11 の項目がカバーできるような、それぞれ専門的な知識をもった方々、例えば、学生指導に関すること、あるいは、図書館に関する知識を持っていて、そういう経験なり知識をもっているメンバーが選ばれた訪問チームが形成されます。

ここでメンバーを選ぶときの、私どもがおこなっています、注意と言いたいでしょうか、方針をお話ししたいと思います。それはチームメンバーを選ぶときに考えているのは、ピア（peer）という概念、仲間であるという概念を大事にしています。すなわち、訪問する

大学がですね、ものすごい大きなリサーチ大学であれば、そこに、例えば、コミュニティカレッジの方が、リサーチ部門の責任者として調査に加わるといことがないようにするとか、なるべく、同じ種類とか、同じサイズとかですね、なるべく評価される側と、評価する人たちとの間にですね、自分たちは仲間、同じ同僚なんだという意識が感じられるような人選をしていくということです。

多くの場合、チームメンバーのなかに、1名か2名ですね、初めての方というのが、おられる可能性があります、多くの場合、大多数は、既に何回か経験したことがある人が、チームのメンバーになりますし、新しくチームメンバーに、査察のメンバーになれるように多くの人をトレーニングして、育てています。

具体的な大学での査察は、日曜日の午後から始まりまして、水曜日の正午まで続く、大変集中した査察でありまして、特に時間がものすごく貴重になってきます。それで、個々のチームのメンバーは、誰が偉い、誰が主導権を握るとい形じゃなくて、なるべく全員が同じ立場で、同じ分量だけの仕事がこなせるように、そのために、実はチームリーダーがおりまして、チームリーダーは決して、チームリーダーの指導のもとに査察の活動をするのではなくて、あくまでも、チームリーダーになっている方は、その参加されている、この査察に参加しているチームメンバーが自由に、自分の意見が述べられるように、しかも、カバーすべき領域がすべて、適切にカバーされているかどうかを（ファシリテイト（facilitate）するとい言い方をしていますが）そういう役割を持っています。

具体的には、日中は大学に出かけて、それぞれの部署を訪問して、その担当者の人、それにかかわる方々にインタビューをし、帰ってきてからは、チームメンバーが相互に、あるいは個別に、その査察した内容が、セルフ・スタディ・レポートの内容と適切に適合しているかどうかをチェックする作業をするわけです。例えば、ライブラリーに関していいますと、何も図書館員だけを訪問し、図書館だけを見るだけではなくて、図書館を使っている学生、あるいは図書館を利用している先生方にもインタビューすることによって、図

書館の機能が大学全体としてうまく機能しているかどうかということをチェックするわけ  
であります。それで、何よりも大事なのは、この査察の活動を通して、査察する側、査察  
される側、ともに大学は我々のものであるという（またここにもオーナーシップ  
（ownership）という言葉がでてきていますが）オーナーシップを共有することが、ものす  
ごく大切な雰囲気といいたいでしょうか、チームメンバーに要求されていることだというこ  
とです。

さらに、大学には、図書館だとかだけではなく、大学で行われている活動のさまざまな  
委員会がございます。例えば、新しい教員を採用するための委員会、あるいは、教員を昇  
級させるための委員会、あるいは、理事会、そういう会のメンバーも招集されておしまし  
て、その方々とインタビューするようになっていきますし、それらの会合で自分の意見を言  
いたいという方々が、自由に参加できる雰囲気になっています。

今話したように、大学の査察に出かけるチームに要求されていることは、なるべく、キ  
ヤンドウ（candor）公正で、オープンネス（openness）をもって、つまり、あらゆること  
を自由に聞いて、しかも偏見にとらわれないで判断を下すということであって、決して、  
その大学がもっている弱さとか、欠点を（クック先生がおっしゃったことは、白い手袋を  
して、穴をほじくるような形で、大学の弱さを見つけるのではなくて）セルフ・スタディ・  
レポートに書いてあることの中に、もし足りない部分、弱さがあつたら、それを指摘する  
と同時に、さらにセルフ・スタディ・レポートの中に書かかれている材料を使って、こう  
いうふうにすればよくなるかもしれないということのサジェスションを含むような査察の  
仕方をするということになっているということです。ですから、あくまでも、査察の目的はその  
大学をよくしよう、という目的であって、悪い点をあげつらって、見下すために出かけて  
いくのではありません。

そして、水曜日の午前中最後の時間帯に、イグジット・インタビュー（exit interview）

と申しまして、チームに参加したメンバーがその大学を訪問することによって発見したこと、つまり、セルフ・スタディ・レポートに書いてあることが文字通りなされているか、あるいは、弱点があったら、弱点はこうであり、こういうふうになればさらによくなるであろう、という、彼らの見つけたことを、大学の関係者の前で、口頭で発表することが要求されています。

先ほど、セルフ・スタディ・レポートがたいへん大雑把な、たった 100 ページにまとめられる、どんな大きな学校であろうと、どんな小さな学校であろうと、まとめられる、ある面でたいへん一般化した報告書になる可能性があるということを申し上げましたが、このチームが出すレポートも、結果的にそういう可能性は多々あります。すなわち、あまり細かいところにこだわらないで、その大学が掲げる大学の目的に従って、その大学が運営されているかどうかということが、第一に述べられている。ですから、あることに要求される 1 から 10 まで全部のことに関してチェックしたということが書かれていなくても、その大学全体がある方向性に向かって、進んでいるのだということがわかる報告書であればいいということです。すなわち、私どものアクレディテーション、基準認定の目的は、先ほどから何回も繰り返していますが、その大学の掲げている大学設立の目的、運営方法にあった運営の仕方、方法がなされているかをチェックすることであって、何か、外から持ってくる客観的な基準で、その学校を、お医者さんのように診断して、ここを直せ、あそこを直せというようなかたちでの報告書を書くのが目的ではないということです。

それで、その報告書は、チームメンバーの文書をまとめて最終的には、チームリーダーによって作成されるわけですが、その報告書は、たかだか 30 ページぐらいの報告書にまとめられなければなりません。そして、それは、その訪問によって、発見されたいくつかの事柄も書かれているでしょうけども、基本的には、その大学にとって助けになる書き方であって、ハートフル・マナー (hurtful manner) ではない。つまり、相手を傷付けるような文言とか、口調は避けたかたちで、その報告書は書かれることが要求されていると

ということです。

それで、先ほど、チームのリーダーによってその報告書はまとめられる、と言いましたけれども、各章といいたいでしょうか、各部分は、それぞれ担当したチームのメンバーが書き上げるわけですし、それをチームのリーダーがひとつの文章にまとめて、完成させますが、出来上がりましたら、それは訪問した大学の学長に送られます。それで、学長はそれを読んで、その報告書にもれがないかをまたコメントをして協会の方に、基準協会の方に送り返す、というプロセスをとります。

### 基準認定の最終判定のプロセス

それで大学から、大学に送った報告書が、また基準協会の方に戻ってきまして、そこで、はじめて基準協会の中の大学基準認定委員会が開かれて、そこで、その書類、セルフ・スタディ・レポート、さまざまな書類が検討されて、この大学は、アクレディットされるか、されないか、ということが決定されるわけですが、その決定を下す、コミッション (commission) 委員会のことについて次にお話したいと思います。

それは、ニューイングランド基準協会の中の大学基準認定委員会です。大学の部分ですね、その大学基準部門の委員会は、ニューイングランドの場合には、18名のメンバーからなっています。そのメンバーは大学関係者からなります。そのニューイングランド基準協会の大学基準認定委員会の役割は2つありまして、1つはどのような基準で大学を認定したらいいのかというポリシー (policy) を決めるという役割。それから、もう1つは、そのポリシーに従って、個々の大学がその基準にあっているかどうかということを判定する役割。両方とも、そのポリシーにかかわるわけですが、その2つの働きを行っています。

それで、チームメンバーですね、大学を訪問するチームメンバーの場合にも、さまざまな大学に対応する人員を選ぶということをお話しましたが、このコミッション、委員会のメンバーも基本的に大学の方々、18名のうち、15名は大学に関係している方ですが、その

大学もさまざまな種類の大学、リサーチ大学だったり、コミュニティカレッジだったり、あるいは、その方々が図書館の専門であるとか、ファイナンスの専門であるとか、さまざまな領域をカバーできるような委員の先生方を選んでいきます。それから、州立大学、私立大学からも同じように公平に選んでいます。

先ほど、ニューイングランド基準協会の大学基準認定委員会では、18名の委員がいることとお話しましたが、そのうち15名は大学出身。残りの3名は、これは後で、どなたかご質問していただきたいのですが、パブリックメンバー（public member）となっているわけですね。大学はパブリック（public）この世に奉仕する機関であるんだから、そのパブリックから選ばれた3人の委員がいる、ということです。すなわち、今、言いましたように、大学はさまざまなゴール、目的をもっているわけですが、その1つは大学が存在しているこの社会、世間、この世に奉仕しているわけですから、大学のベネフィット（benefit）を受ける側の人たちです。その人たちの代表も委員に選ばれております。

大学を認定する委員会は、年に4回、1泊2日で行われまして、多くの時間が先ほど言った、2つの目的、1つはポリシーをどうするか、という問題、そのポリシーに従って具体的に大学を評価するということになります。それで、たとえば、大学の評価という具体的なことになると、個々の大学から、1回のミーティングで、約20の大学を審査することになりますから、たいへんな量の資料をこの委員の人は読みこなす必要があります。（セベラル・インチズ・シック（several inches thick）と言っていましたから）30センチぐらいありますか、高さにすれば。それにはセルフ・スタディ・レポートも含まれていますから、セルフ・スタディ・レポートは100ページですので、それが20冊あったら、それを全部読まなくちゃいけないということですから、大変なボリュームがあります。

その委員会では、出された資料を読んでお互いに、議論しあうということもありますが、もし必要ならば、その会議に、その訪問した資格審査すべき大学の学長や関係者の人たち

をそこに呼んで、また話を聞くというようなこともあります。そのようなかたちで、委員会はたいへん、ハードな仕事だそうでした、しかも、担当している委員の方々は、それをまさに真剣に扱っています。それでは、どういうことに注意しているかということ、2つのこと、(英語で、アカウントビリティ(accountability)とインプループメント(improvement)ということをおっしゃいましたが)つまり、その大学が、まさに適切に建学の精神、目的に従って運営されているかという現実と同時に、さらにその大学が発展していく可能性をもっているか、その2つの点に注意して審査をすることになっています。それで第1に、その審査に値する、その結論を出すに十分な資料なり、データが揃ったかどうかということ、それをまず第1に見ます。それが揃っているとわかったら、次に、その結論を出していくこととなります。

具体的には、最終的にこの大学は基準に達した基準認定校として適切であるかどうかということを見るわけですが、その結論を出すだけでこの私どもの活動が終わるわけではありません。と申しますのは、一般に、1度そのアクレディテーション、認定を受けると、10年間有効ですが、個々の10年間の有効の許可、認定を受けた場合でも、各大学は、5年に1度、報告書を出すことが要求されていますから、それをまた読んでその通りに行っているかどうかということをチェックする必要があります。そのようなことを通して、コミッション、委員会は、なるべく公平に、その大学がさらにいい大学になっていくような建設的な批判を提供することが要求されていく。あくまでも、先ほど言いました、すみっこを突つつくような、否定的な批判ではなくて、さらにその大学が発展していけるような、サジェスションをすることが要求されているということです。

アメリカで行われています、私が行っています基準協会の活動を詳しくお話したわけですが、私のお話している意図は、決してアメリカのやっていることをそのままですね、逐一真似していただきたいということをお話したかったのではなくて、私どもが経験していることを通して、おそらくこれは全ての大学に共通する課題ではないかというものを発

見たので、それをともに分かち合いたくて、このお話をしているわけです。

#### 大学は自分で自己を管理する機関

最後に申し上げたいことは、大学、というか、(インスティテュ・ション・オブ・ハイヤー・チーミング (institution of higher teaching) という言い方をここでしてらっしゃいますが) 高等教育機関というのは、基本的に自己管理できる組織であり、自己管理すべきだというのが、私の考えであります。すなわち、この自己というのは、単に大学に属している個人のことを言っているのではなくて、大学全体がひとつのまとまりとして、ひとつのコミュニティとして、あるいは、ひとつのグループとして、生き生きとしたひとつの生き物と例えれば、それは自らを律していくことができる組織こそ、真の高等教育機関だと私は考えているからでありまして、その一番いい大学は、個人的にも、グループとしても、自分のことは自分で決める、自分で管理できるというのが、高等教育機関ではないかと考えているからであります。

いくつか、さらに付け加えることがあります。

第1点は、そこに書きましたが、セルフ・レギュレーション (Self-regulation) は、基本的に外から誰かがチェックするよりは、自分で自分のことを決めていったほうが長続きする。その活動のほうがいい、と私は考えているからです。

確かに、大学は外部の評価が必要ですが、その外部の評価がさらに有効になるためには、内部で、自らが自分たちを律しているという活動があってこそ、外部の評価が有効になると考えるからです。

それで、特に自己規制というか、自分で自分のことを判断しなければいけない、というのは、個々の大学は個々の大学の考え方や思いに従って行動しているわけですから、それを判断できるのは、内部の人が一番よくわかるということでもあります。



このように自分たちの仲間のことですから、仲間がしていなければ、できていないということも判断できやすい、ということです。外部の人間ですと、内部の人が何やっているかわからない、ということあるけれども、内部の人間だからこそ、お互いに、あの人は何ができて、何ができていないというのがわかるのではないかということです。

(個人的な意見を言うてはいけませんが、今のステートメントは大変おもしろいと思うのですが、) どんな組織でも、だいたい多くの方は、全体の行動に従って、つまり多数は、多くの方は同一の行動をする、ということです。全体のことに批判的に行動する人はいつも少ない。だから、自分たちのことは自分たちで評価できるという考え方です。つまり、みんなが認めていることを、だいたいみんながやっている。みんなが認めていることに反対している人は、ごくわずかだと考えざるを得ない。

確かに、この自らを律するという方式は完全な方式だとは思いません。例をお話になっていますが、チャーチル(Churchill)の言葉を引用されて、民主主義っていうのはいろんな制度があるなかで、まあ、いいだろう、でも完全な政治形態ではないかもしれない、という言葉が引用されて、確かに自己規制ですね、自ら自分自身を律するという方式は、ある点で人間を墮落させてしまうおそれもあります。イージーな方へイージーな方へとってしまう恐れもある。あるいは、大学が果たすべき役割が、公共のために奉仕しなければならないというのに、自らのためだけに大学が奉仕してしまう、ということになってしまうという危険性も多々ある。ですけれども、大学が自ら律するという方式が、いろんな中で他の方式よりも、さらによい方式だと信じているから、この方式をとっているわけであります。これが、決して私は、完全な方式だと、ここで主張しているわけではありません。

それで、私が経験を通して確信していることは、大学がさらによくなるための努力は、自らしなければ、よくなる、逆に、自ら努力することによって、一番いい改善や改良がなされるということを信じているからです。ですから、このインブループメント

(improvement)ということとセルフ・レギュラトリー (self-regulatory)ということとは、ひとつのことの表裏と考えています。すなわち、あらゆる改良、改善は自らなされるべきだと思っているからです。

内部の評価があってこそ外部の評価も生きる

それで、このセルフ・レギュラトリー (self-regulatory) 自ら律するというやり方は、いろんなやり方があると思いますが、ともかく、高等教育機関の中から、自ら大学の中から、改良、大学を良くしていく、ということがなされなければなりません。その動機や最初の活動は、大学の外ではなくて、大学の中から始まる必要があると思います。それで、後で、もう少し、外部の評価が大事だということをお話しますが、外部の評価も内部の評価、自己評価があってはじめて生きるなのであって、内部の自己評価がなくて、外部の評価があった場合には、その外部評価はたいへん悪い結果を大学にもたらす恐れがあると信じているからです。

すでに、何回もお聞きになりましたように、大学を認定する基準認定の場合もそうでしたが、セルフ・スタディが、まず基本になっている。ですから、このセルフ・スタディ、自らを律していく、自らをチェックするという機能、それがたいへん重要な要素だと考えます。

しかも、このセルフ・スタディ・レポート、それは決してそれを書き上げるということ、書き上げた結果が大事なのではなくて、セルフ・スタディ・レポートを書き上げるプロセスにおいて、相互に批判しあう、相互によい点を見つけあう、悪い点を見つけあう、それに対する改良点を考え出すという、そのプロセスがものすごく重要なわけでありまして、このセルフ・スタディを書くプロセス、経過、過程を通して、関係する人たちの間に、オーナーシップ (ownership) とコミットメント (commitment) という言い方ですが、大学は我々のものである。そして、すべての人が、大学にかかるすべての人が、この大学に参画

する活動が重要なのです。

確かにですね、内部だけである種の問題は解決しないかも知れませんが、私どもが、このセルフ・スタディ・レポートを強調するのは、アクレディテーションの基本的な目的は、その大学が現在すばらしいというクオリティ・アシュアランス (quality assurance) だけではなくて、さらに発展するのだということ、さらによくなっていくのだという、未来に対する期待、それを調べていく、それを可能たらしめているものだと考えるからです。

そういう面で、まず、学校、大学の中で、自ら律し、自ら計画を立て、自らそれに対するチャレンジをするということがあった時にはじめて、外の評価が生きてくる。外の評価が生きるためには、まず、内部での評価が十分になされていることが必要であると考えからです。

それで、もう少し繰り返しになりますが、セルフ・スタディだけで十分だということがいえないことがたくさんあります。例えば、大学が内部に一生懸命、そのセルフ・スタディ、自己改革を行っていても、それが外に見えなかったり、その結果が表に現れないために、大学の活動が外の人に何の影響も与えなかったりということが起こりえますから、セルフ・スタディだけで、すべてのことが解決するとは考えておりません。

外部の評価もセルフ・レギュラトリーであるべき

ですから、ある面で外部の評価がここで必要になってくるわけです。ただし、何回も繰り返しますが、外部評価のやり方も、あくまでも内部の評価の活動が、十分になされているときに有効であるということが第1点。第2点は、外部評価のやり方も、内部評価のやり方と同じ、セルフ・レギュラトリー・モデル (self-regulatory model) 同じようなやり方でなされなければならないということです。

内部評価と外部評価が同じ、そのセルフ・レギュラトリー・モデルであるべきだという1つの例は、例えば、外部評価はピア・レビュー（peer review）であって欲しいということです。つまり、大学の評価は同じ、大学人がするべきだ、その大学とはどういうものであり、何をやっているかということ、同じようなことをしている仲間が、他の仲間を評価していくという外部評価の方式が、一番適切だと考えているからです。

この大学人同士が相互に査察しあう査察、外部評価が、なぜ良いか、いくつかの理由があります。1つは、仲間のほうが、他の外部の人たちよりも、組織に対して、他の人に対して、たいへん優しいと。つまり、つまらないことをほじくったりというようなことをしたりしなくて、つまり脅迫して早く直せ、だとか、そういう相手に脅威を与えるようなアドバイスはしないだろうということが1つ。もう1つは、仲間同士のほうが、気軽に意見を言い合うことができる、（オープンネス・アンド・フランク（openness and frank）という言葉がここに書かれていますが、）そういうものを持っている。それから、仲間のほうが、その大学が持っている、あるいはその大学がやろうとしている高等教育の活動に対する理解が、他の人たちよりも持っているわけです。つまり、相手をよく理解することが出来るわけです。あるいは、そのシステムはどうやって動くかということに関しても、仲間のほうが、よく理解しているから外部評価も仲間がやったほうが良いと考えます。

（ここでも先ほどの基準協会の活動を思い起こさせるわけですが、）この外部の評価、外部評価もですね、その大学が持っている、クオリティ、現状を認定するだけではなくて、さらに、いいものになっていくことを後押しする、そういう外部評価活動であるべきだと思うわけです。

さらにですね、そのピア・グループ（peer group）お互いに大学人が大学を評価するという大学評価は問題がないかといったら、いえ、考えによたらたいへん問題がありまして、1つは信用の問題があります。ある面で、片目をつぶったり、両目をつぶって、見る

べき問題を見なかったということも起こりえるでしょうし、そういうことが、結果が、その大学の全体の評価をさらに悪くしてしまうおそれもあるわけですが、相互に外部のピアー同士が査察するという方法以外に存在しない。それが今のところ、最も良い方法、周りの大学人に対して、よい評価を、結果として与えることになっていると考えるからです。

さらに繰り返しになるかもしれませんが、大学を評価するときにも、その大学が掲げる建学の精神に基づいて評価すべきだという、同じ方式が外部評価の場合にもなされるべき。すなわち、その大学がしようとしていることを、内部の人も評価し、学部の人も評価するという、同じ方向に向かって、審査がなされるべきだと思います。

今まで、アメリカ、私どもが行っている基準協会の活動をお話したわけですが、私どもの行っている方式は、ミッション・ドリブン・スタンダード (mission-driven standard) すなわち、その大学が掲げる建学の精神や目的に合っているかどうかということを中心的に審査する。

個々の大学は明確なミッションを持っているか

そこで問題となるのは、個々の大学が、そういう建学の精神なり大学の目的を、きちんと持って、それをみんなにわかるかたちで宣言しているかどうか、ということですから、もし、ない場合には、まず、それを大学の内部で共通に作り出すということが必要になってきます。

そして、その大学に建学の精神といいましょうか、その大学の目的ということがはっきりと掲げられた、ミッション (mission) が掲げられたからといって、次に問題になってくるのは、それを遂行するだけのリソース (resources) いろんな資源を持っているか。それは単に、人材だけでなく、お金だけでなく、それらのものが有効に、組織的に機能

しているか、そういうものを大学が持っているか、ということが次に問われるわけです。

その大学に、明確に掲げられた目的、ミッションがあり、それを支えるための資源、材料、組織があることがわかって、一番難しいのは、それらが、どのような形でその目的のために使われているか、つまり、有効に使われているかという、効果性を調べるということは、これは確かに至難の業でございます。ですけれども、それもですね、セルフスタディのなかで、自らが、こういう理由で、こういうふうに進歩している、これが有効に使われているのだ、ということを示すことが一番わかりやすい方法だと思います。

それで、(先ほど、ちょっと訳し忘れたのですが、大学が自らですね、目的があり、そのためのリソースがあり、それを有効に生かして大学がその目的を達成しているということを自ら証明する必要があるというといいましたが)それは同時に、外の人がわかる形で表明する必要がある。次に大事なのは、その表明された、外の人がわかる形で表明された証拠が、さらに発展していくという可能性、あるいは計画性も、その中に組み込まれる必要があるということです。

#### 現在の質と将来の質の保証

大学の質的向上の質というときには、必ず現在の質と同時にそれが将来に向かってさらによくなっていくという、この、今と未来の両方を含む、質を保証する、それが私どもが行っている大学基準協会の認定制度であります。

大学、あるいは教育の評価をする、ということは、たいへん難しいことで、例えば、健康だとか、安全のように、何かのある数的なもので、それを測ることができない種類のものであることは、みなさんよくおわかりだと思います。ですから、評価というものも、ある面で、たいへんオープン・エンデッド(open-ended)あるいは、主観的なものになってしまう恐れもあるのですけれども、そのような形でしか、大学を評価することはできないのではないかと思います。

このように大学が質的な価値をいかに保証し、さらに将来に向かって保証を続けるかということ、ものすごく大事なことです。それは同時に、大学にとってだけでなく、大学の奉仕する社会にとって価値あるものでなければならない。ですから、もし、外部評価ということがなされるときには、このパブリック、社会が、どういうものを、その大学に求めているかという観点も、やはり考慮する必要があると思います。

確かに、私どもは、私が働いている大学基準協会は、大学のメンバーシップによる民間の団体ですが、でも、大学は、この社会のために奉仕している機関である以上、たとえ、このメンバーシップによる民間の団体であっても、パブリックな責任、この社会に対する責任を、ともに負わなくてはならないという立場に置かされています。ですから、内部評価、外部評価のなかとして、大学をよくするということが結果的に、その大学が存在している社会に適切に奉仕するものでなければならないと思います。

大学は、その大学が存在する社会の影響を受けますし、その大学の置かれている社会の要求に応えなければなりませんけれども、大学は、それ自体は、自己点検と外部評価によってさらによくなっていく。しかもその時に、大学がよくなっていくという時に、何かです。ね、言葉でいうと、プリスクリプティブ (prescriptive) な、なにかこうすればよくなる、ああすればよくなる、という個々のことではなくて、さらに全体としてよくなっていくのだというアシュアランス (assurance)、アセスメント (assessment) を、この基準協会の認定は提供していると考えます。

今日お話したことが、みなさまがたの状況の中に、何か役立つものであれば、心から幸いに思いますし、今後もみなさんといろんなかたちで協力し合うチャンスが与えられることを願っております。どうも、ご清聴、ありがとうございます。

【司会：喜多村】

まさにアクリディテーションの精神とプロセス、ぴったりのお話をしていただいたと思います。同時に、申し遅れましたが、クック先生の講演を非常に適切に、わかりやすい日本語で、お訳いただきました、大阪商業大学の鋤柄光明先生に拍手をお願いいたします。